

それは、もう

『おがさわらギョサン』

P-MAKA! ①

「ギョサン」。今や、島の誰もが履いているのではないかとまで思われる、このはきものには、i-BOがバカマジメに、なんと2号連載で迫ります！

第1回目は「ギョサンは、どれほど履かれているのか？」

★今日のギョサン指数は？

2006年2月12日午後5時の父島西町。賑う入港日にぎわの商店前。薄暗い曇り空の下で、おが丸と共に勝丸のエンジン音が、闇と一緒に街中へしみだしてゆく。旭山は次第に鋭角なシルエットとなり、その上に月がぼんやりと出ている。風に吹かれた街路樹はオレンジ灯に浮き立つ葉っぱをバラバラ揺らしている。刻々と暮れてゆく中で、反対に商店の灯りだけが煌々と浮き立ち、吸い寄せられるように、車、バイク、自転車が出てきて、牛乳、果物、野菜、魚、肉、雑誌、解凍パンなどを求める人の列が続く。そんな、いつもとかわらぬ入



ギョサンだって進化する!? マルヒオルジナルは、島(お店)でさらに手が加えられている固有種ギョサンだ。

港日の夕暮れに、カウンターを握りしめた怪しい人影。口に出さなくとも顔には「恥ずかしい」と書いてある。ここ10年で、もっとも無意味・・・いや、一番楽しい調査が始まったのだ。ギョサン定点観察法。ただただ、行き交う人の足元を見つめ、冷たい、あるいは哀れみを含んだ視線を浴びながら、それでもめげずにカウンターを押し続けた・・・

★ギョサンは街を席巻せっかんしていた！

2006年2月12日夕方5時〜7時。父島西町小祝商店の前辺り。ここで数えた人の数 186名。その内のギョサン数 68名。

ギョサン率はなんと3割6分6厘。野球だったらイチローと争えるハイアベレージだ。1時間当たりのギョサン指数はなんと34GS(ギョサン指数II GSはまったく意味がありません)、つまり2分に1回以上ギョサンを見

ている計算になる(それがどうした)。さらに悪のりして、今回の186人が、父島の履き物事情を反映していると仮定して、父島の人口二千人に今回のギョサン率をかけると、なんと父島のギョサン人口は732人となる。なるほど、今やギョサンは間違いなく父島の足?なのだった。でも、ここで調査日のことを考えてほしい。2月半ばの曇りで風のある夕方。ちょうど風邪もはやっている。南の島とは言え十分寒いのである(この日の最低気温は17.2度)。

これが、真夏の小笠原の入港日だったらどうだろうか? つまり、この日は、1年の中で、もっ

★ギョサンの故郷？
 手当たり次第に調べると、ギョサンの故郷へ続く断片が見えてきた。今からおよそ 30 年前。日本は四国の、とある履き物メーカーが、鉄やアルミ合金などの金属の鑄型に、柔らかい合成樹脂を流し込み、これを冷却してつくる一体成



生協にはギョサンの先代とも言える「ゴロヘイぞうり(島名)」がある。米軍時代より続く、もう一つの伝統の島の履き物だ。

島のギョサン率は最低でも3割6分6厘で、少なくとも732人はギョサンを持っているに違いないと結論づけたのである(ホントに強引だ。)

の調査から、父ともギョサン率が低い入港日と考えられないだろうか!? よって、まったく強引ではあるが、TPOとしては今回の



今やギョサンは、小笠原ブランドの一つ!? お土産に買って行く人も多い(アサヒ薬局)。

型のサンダルを考案する。正確には「射出成型」と呼ばれる方法で、基本的にプラスチックのバケツやコップなどと同じ製造法だと言う。これがやがて、履き物産業の盛んな、お遍路の地・四国や古の都・奈良などで花開く?。今では、これらの地域で製造された一体成型のサンダルが、小笠原では「ギョサン」と呼ばれて盛んに履かれているというわけだ。

このサンダル、少ないようである、意外に日本各地の雑貨店、商



「母島ギョサン」として名高い母島漁協販売モデル。全面のイボイボや、やわらかい履き心地で人気。父島の人が自分用やお土産で購入することも多い。白色ギョサンを初めて入荷し、ブームの火付け役となった。

店の軒先などで見ることができ。が、たいていは茶などに限られた色で、場所も店の片隅が相場と決まっている。小笠原のように店の真ん前に堂々と何色も並べられ、さらに店毎に品揃えを競っている土地は、今のところ他になさそうである。これは、父島・母島の各商店が苦勞して、色、デザイン、足底のイボイボ、サンダル裏の溝の深さ、硬軟などなどに、こだわりの品揃えをしているからなのだ。小笠原ギョサン王国を支えているのは、島の各商店の遊び心&こだわり満点の品揃えだったのだ。



ベンハータイプの子供用ギヨサン

★ギヨサンを買うなら小笠原！

現在、ギヨサンを製造しているメーカーさんは、いずれも伝統ある製造元で、昔からの取引先をとても大切にしている（個人販売、少数販売もしていない）。「小笠原ギヨサン王国発展のためにも、ギヨサンは島のお店で購入してください。」とのことだった。なにより、各店が競ってできあがっている小笠原全体の品揃えが天下一品なのだ。ギヨサン買うなら小笠原なのだ！

また、あるメーカーさんによれば「ギヨサン」という名称は、小笠原発の言葉として、最近知ったばかりだという。そして、「小笠原で売られているギヨサンが欲しい。」という声が他地域からも聞こえてくるようになってきた。ギヨサン文化

拡大？」の気配なのである。こうなれば、先駆け・元祖の地の名を入れて、これからは「おがさわらギヨサン」と呼ぶのも良いのではないか、そう思うのであった。

★カリプソサンダルⅡギヨサン？

ここで、小笠原では「ギヨサン」と呼ばれている一体成型サンダルの説明をしよう。サンダルには、いくつかの型があり、決まった呼び名があるらしい。小笠原のギヨサンは鼻緒のあるタイプでこれを「カリプソ（サンダル）」と言う。同じく鼻緒はなおがあるが親指がガードされるもの。子供用もあって、脱げにくさから密かな人気がある型は、「ベンハー（サンダル）」。映画ベンハーの登場人物の履き物にちなんでいるようだ。なお「ギヨサン」ではないが、鼻緒のないオースドックなつつかけタイプは（看護婦さんが履いていたり、温泉街で見たりするあれ）、「ヘップ（サンダル）」と言う。そう、映画ローマの休日ローマの休日のオードリーヘップ

バーンの履き物がモデル!!。これらが基本となり、今ではメーカーそれぞれにニュータイプも出していて名前も多様化してきているようだ。その中で、小笠原で特別に定着した鼻緒のある型がカリプソであり、業界風には言えば小笠原ギヨサンは、一体成型サンダルのカリプソモデルまたは、その派生モデルということになるようだ。

◆悪のりはつづく◆

次号ぎよさん第二弾

今号では、意外に奥が深い「小笠原のギヨサン事情」だけで終わってしまいましたが、次号では、カリプソサンダルが、いつから小笠原で「ギヨサン」になったのか、その誕生の謎？に迫りたいと思います（どこまで行けるか・）。さらに、現在「i-Bo」では、父島・母島の、まったく適当に選んだ方々にギヨサンアンケートを敢行中です（目標は100人！現在50名程度）。この笑撃的なアンケート結果も合わせてご紹介いたします。乞うご期待！